

乗合自動車の上の九つの情景

太田省吾

他人のまえではことに、私たちとは、そうみえるだけのものでしかありえない。
時おりは透けてみえる。

しかしこの生成なかばのものが、その通りのものであるかどうかは、疑問が残る。
なぜなら、私たちがその時々におのれをみいだす場たるこの「へいま」が、暗黒である。
のみならず、それが闇であるのはなによりも、私たちの生がこの「へいま」にあるから、
本来そういうものだからだ。

E・ブロッホ

登場する人びとは

鈴をふって歩く遍歴の||葬儀人

ひとつの唄しかうたわない||歌手

蛙の叡智を理解する||車掌

上衣を脱ぐ||闖入者

触らないで欲しい||犬番

煙突を見る||男

内気な||先生

親切な||おばさん

あの娘で通じる||娘

みんなにそう呼ばれる男||ハッピー

他に、鳥と魚

乗合自動車が一台。

ほとんど原形をとどめないほどひどくいたんでいるが、これはどうやら物理的な衝撃によるものではなく、どこか、腐蝕、あるいは風化によるものといった印象をうける。

昼のあかりが、しだいに夕やみに変化する。

鈍い含みのある素朴な鈴の音がどこから聞こえはじめる。

夕やみは、やがて、夜をむかえようとしている。

星が出る。

鈴の音、大きくなり、車掌、犬番、男、先生、そして、闖入者が登場。

大型のジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかげる。

その下から一枚の絵。〈ずんぐりした緑色の鳥〉がうかぶ。

鳥

よくあることですが、寂しい小屋の窓には灯りが一つ点っていました。

その小さな灯りはなによりもその周囲を包む闇のために必要なものでした。

闇の中で小さな灯りを点していたのは、一人の老人と一人の少女でした。

老人は、その燈りを自らの手元を照らすことよりは、闇のために点していたにちががありません。それほど、闇と光と影は、二人を中にして交歓しあっていたのです。

私は、梢から眺めていました。

二人は身体の表を輝かせていました。

二人は黙ったままでした。

私は、私の窓ごしの呼吸までが二人の静けさを乱すような気配に息を殺しました。

老人は静かに仕事をつづけ、少女は老人の手元と顔とを交互に、ゆっくりした周期で覗いています。

私も、窓ごしにやってくる木槌の音や、木をけずるなめらかな音を聴きました。

これは一枚の絵でした。あるいは、それは、何処からか遠い路みちのり程を経てそこへやって来た瞬間でした。

その光景の優しさは、人の何ものかを失った時の、そして、それによってはじめて手にすることの出来た、あるものをしていました。

私はよく思うのです。人にとって優しさとは、それ以外にとりようのない、彼らの最後の態度ではないかと、それは全く価値のないものです。そして、それ故にやっと他によって犯されない、沈黙と通ずる最後の態度なのです。

老人は、仕事の手をふと止めると、深い目差して少女を覗きました。少女は覗め返しています。老人はやがて、何か一言口を動かしました。

少女の手がのびて、ラセン状の木屑をとりました。そして、ひとつ頷いてから、少女は微笑みました。老人は、又仕事に戻りました。

老人がその時何を口にしたのか少女が何を頷いたのかは、窓ごしのことですので、私には聴きとれませんでした。

バスの上の人びと、目を閉じ、沈黙している

第一の情景——〈闇の夢〉

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかげろ。

絵へ大きな空と紫色の低い家並

バスは闇に沈みかけている。

鈴の音、まだどこからか聞こえている。

遠くに、娘がひとり。永いことあるひとを待っている、

もうそのひとは来ないだろうと知りながらも、それでもやはり、まだいるといった様子。

歌手が、それを離れて眺めている。

彼は、大きな荷物をかつぎ帽子をかぶっている。

娘は、ゆっくりと歩きながら唄をうたいはじめる。

へわたしは今朝も目がさめた

わたしは

今朝も夢をみた

わたしは

ニグロの女の子

だから

ジャズをうたってた

だけど

きれいな声だった

だけど

きれいな声だった

わたしは

喉から血を出した

それでも

唄はしゃがれなかった

わたしは

今朝も目がさめた。

娘、ゆつくりと去く。

遍歴の葬儀人が客席から鈴をふりながらやってくる。

何ものか被り、杖がわりでもある傘を手に、身のまわりの品を容れた小さなりュックサックを身につけている。

葬儀人 眺みてましたね。

歌手 ……ええ。

葬儀人 どうでした。

歌手 ……ええ、いいなあと思って。

葬儀人 いいなあと思って……なるほど。

歌手 なにか……。

葬儀人 いいや、なに……なにがいいのかと思ひましてね。

歌手 ……ええ、……あなたは、どなたです。

葬儀人 どういったらいいんでしょう。

間

歌手 ぼくも、それを考えていたんです。なにが、いいのかって。

葬儀人 あんたは、唄い手だから……。

歌手 ……ご存知ですか。

葬儀人 昨夕^{ゆうぐ}。あんたは、あの店でうたっていましたな。

歌手 ええ、あの店でうたいました。……どこにおいででしたか。

葬儀人 おしろ、こういった方がいいかもしれない。あの唄のことですよ、娘さんの。あの唄はわたしにとってはひとつの問です。へひとはどの程度感じることができるのかへへひとはどの程度感じうるふりをするのかへというところに生れる例のやつです。そうそれはほとんどわかりきらない問題だ。だが、それはそれでかまわない。……こういったいい方は、あいまいといえはあるいはそうかもしれない。だが、このあいまいさというやつを勘定に入れないと、まったくとんでもない答が出してしまうことが時々ありますよ。あの娘さんの唄にしても。

歌手 ぼくの様子がどこがおかしかったんですか。それで……。

葬儀人 いや、わたしも遠くで眺てましたよ。そうだね、何故こんな話をしはじめてしまったんだろう。ただ、なにかが終っ

たあとでは、誰かにこころの話をしたくなるんだ。通じますか、わたしのものいい？

歌手 ……。

間

葬儀人 今夜は、どこのお店でうたうんです。

歌手 ええ……バスに乗ります。

葬儀人 見えますな。あのバスですね、あそこに。

歌手 ええ、ひとがみえます。

葬儀人 わたしも、あれに乗るんですよ。

間

歌手 今夜もどこかでお葬いがあるんですね。……思い出しました。昨夕あの店でお葬いがありました。

葬儀人 あんたは、あのごたごたのあいだ中、ずっとうたっていましたな。

歌手 ええ、支配人に命令されていました。へ女がひとり殴り殺されただけのことだ。店を閉めるわけにいくだろうか……
ぼくも、たしかにそうだと思って……うたいました。

葬儀人 そうですか。……いや、安心しました。わたしは、自分の素性がどうも……説明するのが、どうもいい気持がしないんですよ。葬儀人なんてね、いやな気持になるんです。わたしを知ってる人は、気をきかせてへひとを探している〳〵なんていってくれますけど……あれは、親切な人の隠語なのです。

歌手 ひとを探してるんですね。

葬儀人 気がつかないと思ってましたよ。あんなに真剣にうたって……何故あんなに真剣にうたうんですか。まるでこう息がつまりそうでしたよ。汗も出して。いつもあんなにしてうたうんですか。

歌手 ……ええ、昨夜は。

葬儀人 これは忠告だが、お客さんの前では、楽しい唄をうたわなくちゃいけない。

歌手 ええ……。昨夜は、あの女のひとの屍体の前で、ぼくの精神の門番が眠りたがったんですよ。それでね、そいつをたたき起そうと。

葬儀人 唄は楽しくうたうもんだ。それに、あんなにしてうたう唄じゃないようだったな、あれは。少し無理していたよ。

歌手 そうです……。

葬儀人 そうか。門番を起していたんだね、汗を流して。

歌手 ……それにしても、門番をやつは何故どいつも居眠りしたがるんでしょう。

葬儀人 そういえば……昔からだね。

歌手 おもしろいですね。

葬儀人 叱ってやるのかね。

歌手 ええ、叱ってやるんです。へおきろ〜時々はおどかしてもやるんです。

葬儀人 うろろろするんだろ、門番は。え。へここは何処だろう〜って。居眠りしていたんだから。

歌手 起されるとへここは何処だろう〜って考えるもんですからね、彼もやっていましたよ。

葬儀人 たいていは、そうだね。

歌手 でも、近頃じゃ……こつちを見返してくるんです。

葬儀人 ああ……。なんてことだろう。恥をしらなくなったんだな。だが、策^てはあるもんだよ。

歌手 ええ、考えました。

葬儀人 で……やったのかね……門番の夢を覗いて……。

歌手 やりました。今朝でした。

問

葬儀人 さあて、腰をあげようかね……。

歌手 ぼくは、精神^{こころ}の門番と訣別します。別れることにしました。

葬儀人 ……決心するなら、やってからにした方がいい。……口^{くち}にしていることと、わるいことがあるんだよ。訣別するって、

これからのことなんだろう。……遺言で決心する人だっているんだよ。、

歌手 ……遺言で、決心する人が、いるんですか。

葬儀人 立会ったことがあるよ。遺言でね、決心を語るんだよ。やりとげることができないにしても、遺言でなら許されるとそのひとは考えたんだね。そのかわり一生黙っている……それはつらいことだったと思うがね。それでも、わたしは、そのひとの臨終のことばを聴いていてね、ああこれでも遅すぎることはないんだって思ったのさ。

歌手 ……。

間

葬儀人 こういうひともいたね。このひとは、一週間ごとに決心するんだよ。お酒をやめようとするんだよ、一週間ごとに。

つまり失敗するんだがね。それは決して不真面目なもんじゃなかった。あれは、〈決心〉といってもいいだろうね。やるんだよ。だが、いつもしくじるんだね。いつもしくじっていた。それがもつて、そのひとはしくじりをこらえる可哀そうな顔つきになってね。可哀そうな顔つきだ、そんな顔になってしまったよ。へ今になっちゃ微笑むなんてのは、そりやとてもむずかしいことだ。っていつていたよ。気の毒だった。そういえばあのひとは、どうしてるのかなあ。

歌手 ぼくのことですか。

葬儀人 いや、そうじゃないさ、あのひとも、あれで大したひとだったと思って。決心の話をしていただろう……思い出したんだよ。

歌手 いろいろなひとを見ているんですね。

葬儀人 ああ、いろいろな事に出会ったよ。

歌手 いろいろな死人にあっているんでしょから。

葬儀人 生きたひととき。

長い間。

葬儀人、鈴をもてあそぶように鳴らす。

歌手 あのく、のひとの目の前で、歯を噛み砕いて死んだおばあさんがいましたね。

葬儀人 見たのかね、あそこにいたんだね。

歌手 ええ、でも、ぼくは、見捨ててきました。すぐに出かけましたよ。大ぜいのひとたちといっしょに。

葬儀人 ああ、出かけるよ。それがどうしたのかね。何かができそうない方をするじゃないか。大ぜいの人たち……あんた

がどう考えようと知ったことではないんだよ。おばあさんは死んだ。それに……みんな闘っているんだ。

歌手 ……。

葬儀人 ごらん、だから、とても静かじゃないか。

歌手 ええ、わかってます。

間

歌手 ええ、あのおばあさん、とても怖かったです。ぼくは……一生何もやりつづけることができなんでしょう。少しまともな人間なら、あなたのように、何事かをやりつづけます。それでなければ、あのおばあさんのように何事かのためには狂うんです。まともな人間はみなそうします。

葬儀人 あいまいさを勘定に容れるんだよ。唄をうたいつづけることだって……。

歌手 ええ、きっとそうかもしれません。

葬儀人 雄々しいことかもしれない。楽しい唄をうたいつづける。

歌手 ああ、本当にいいですねえ……一生やりつづける……でも、ひとはどうやってそれを手に入れるんでしょう。ぼくには、やはり、どうもコツがわかりきらないんです。

葬儀人 ……さあ、バスが待ってるよ。

歌手 ぼくは、どちらかというと、穏やかな性格たちですからね、きっとやりつづけることしか似合わないんです。狂うことはありませんからねえ。

葬儀人 そうだねえ……あなたは、どちらかというと穏やかな性質たちだよ。狂うことはないようだ。

歌手 ……でも、まともなひとは、みな……。

間

葬儀人 ……みくびっちゃいけない。どんなことでもだ、自分だって。唄をうたうんだ。拾って歩くんだよ、どんなものでも

だ。自分だって。……そうだね、拾って歩くんだよ。

歌手 ええ……。 (ゆっくりと立つ)

葬儀人 自分の唄をみくびっちゃいけない。とにかく、それをやってるんだから。わたしだって、わたしの葬いをみくびっちゃいけない。……ねえ。でないとしたら、他の人間になっちまうより仕方がない。他のひとにでもなって、どうにかしなくちやならないじゃないか。

歌手 ……ええ。

葬儀人 さあて、行こうかねえ。(小さく) あんたは仲間だよ。……ほうら、すっかり闇が包んだよ。真暗闇の夢をみたことがあるかい。星が出たね。この時刻になると思うんだよ。……今に、これが、闇が歩き出すことになるってね。……それに夢からさめても、やっぱり夢の中だったら、ひとはどうするのだろう。

歌手 ……。

葬儀人 ……闇が歩き出すんだよ。強姦された女の子は、そこでは相手をのろい殺すことも、やさしく恋することもできる。……だが、昼のくにのやつらは、へこは何処だ、ここは何処だ。……って、闇をみくびっていたから、そりや大変なことだろう。怖がるだろうね。夢からさめてもやっぱり夢の中なんだから、居場所が捜せやしないのさ、ただただ怖いんだよ。ところが、そこは、そんなに怖がるようなところじゃないのさ。昼間のくにで居場所をもたなかったひとたちにとっては、そのときは、どこへ行っても、自分の居場所だよ。きつと深い空の底までもさ。

歌手 いいですねえ。

葬儀人 王様は、王様は奴隷に支配される。王様は王様の夢をみることは出来ないからね。わかるかね……。夢からさめても

夢の中だったら……。星が出かかるころには思うんだよ。今に、闇が歩き出すことになるって。

間

歌手 バスが待っています。(手をさしのべる) あなたは、やりつづけるんですね。

葬儀人 ……いや、ありがとう。(立つ。そして独り言のように) 王様は奴隷に支配される。拾うんだよ。がまんして、えっ、拾って歩くんだよ。出喰わしたものはなんでもさ。がまんして。唄を、うたって欲しいんだがね。

二人歩きだす。歌手、うたう。葬儀人、合わせて鈴を振る。

(小さな虫のあと追って)

小さな虫のあと追って

あのこは

だんだんいってしまふ。

いちにちいちにち

いってしまふ

あれだけで

まだ帰ってこれるのに

もうあんなに遠くへ

いってしまった

いってしまった

右手に船

左手に海もって

小さな虫のあと追って

第二の情景 —— 〈闖入者は上衣を脱ぐ〉

大型ジェット機、低空を飛ぶ。

あたりがかける。

絵〈眼をこちらへ向けた魚〉

乗客は、目を閉じている。

闖入者、車掌にくっついてる。

車掌のあとを二、三度追いかける。

闖入者 (車掌に触わる) あのお、バスは、動いているんでしょうか。それとも、止っているんですね。

車掌 つまらない質問です。あなたのおくにはこういうとき、どういのですか。外をござらん下さい。景色はどうです。

闖入者 わたしのくには、そんな口のきき方はしません。

車掌 ……。

闖入者 あのお(先生に触わる) あのお、景色はどうでしょうか。

先生 ……お願いします。触わらないで下さい。(望遠鏡を覗いている男の方へ身を寄せる)

犬番 (たしなめる) 絶景です。

闖入者 あのお、といいますと……動いているのでしょうか。

犬番 あなたは、どこの方ですか。絶景はあたかも、一幅の絵のようなもんです。びくとも動ぜんもんです。

闖入者 (又、車掌に近づく) あのお、景色は動いていないそうですが。

車掌 ……では、停止しているのです。。

闖入者 あのお、笛が、そういえば、たしかさつきお巡りさんの笛が聞こえてました。

犬番 この方ではないから無理もないが、あれは潮の音です。おどろかれましたか。

闖入者 あのお、あれは潮の音だといっていますが……。

車掌 いろいろと勝手におっしゃっては困ります。バスに御乗車になった以上、私どもにお任せ下さい。

犬番 そう、このバスに乗った以上、すべてお任せすべきです。そうですね。

闖入者 そんなつもりではなかったんです。あのお……。

男 (望遠鏡を覗いたまま、きっぱりと) 降りたらどうですか、一寸外を見物でもなさったら。

闖入者 そんなこと……許されるのでしょうか。

男 半々。

闖入者 ファイフティ、ファイフティ……。

男 そういった場合、あなたはいつもどうされますか。

闖入者 えっ……あのお、事によりけりですが。

男 賭けてみませんか。

闖入者 賭けはあまり……。

男 つまりは、優柔不断の性質たちなんですね。

闖入者 とてもひどい。あのお、それはひどい。

男 じゃあっと、やってみて下さい。

闖入者 あのお、賭けました。

男 どっちに。

闖入者 まえ……あと……まえ。

男 まえですか。

闖入者 あのお、いけなかったんでしょうか。

男 何番目のまえです。

闖入者 あのお……あなた、何を見てるんですか、よけいなことですけど。

男 煙突です。何番目のです。ごまかさずに。

闖入者 とんでもないですよ。……あのお……失礼ですが、何の賭けでしたでしょうか。

男 そうです、それが問題の核心です。あなたは、このバスを降りられるかどうか賭けたのか……。

闖入者 そうです。

男 それとも、それを車掌さんに許してもらおうとするかどうかに……。

闖入者 それでした。

男 それを申し出るべきかどうか。

闖入者 ああ、うっかりしてました。

男 まずは、それを誰かに尋きいて……。

闖入者 まったく、……わたしはどうかしていました。(声をひそめる) なにしろ、永年計画していた旅行が、真面目なもので、それが実現しましたもので、気が顛倒てんたうしてしまっているのです。ウ、フ、フ、フ。

男 どこから始めますか。

闖入者 フ、フ、フ、フ……フ、フ、フ、フ。

男 ウフ、ウフ、ウ、フ、フ。

闖入者 あのお……。

男 ウフ、フ、フフフ。

闖入者 (怒る) わたしは、善意の市民です！ ほとんど、革新的といってもいいくらいです！

みな目を閉じ、闖入者に答えない。

闖入者、あたりを見廻している。

闖入者 あのお、バスは、(元気づけて) 動きそうもありませんね。……あのお、一寸外へ出てもよろしいでしょうか。

車掌 ……。

闖入者 あのお……。

犬番 さあ、車掌さんに尋かなければ、何とも。……この方が、外へ出たいといっていますがな、ほんの一寸のあいだでいい
そうだが。そうでしたね。……用件は……取り立てていうほどのことでもない。

闖入者 附近を見て廻りたいのです。ここはとても不幸なく、だという話ですから。

犬番 あたりを眺めたいそうです。

車掌 ……笛を二度吹きます。そうしましたら発車致します。その時にお戻りにならなければ責任はとれませんから。よろし

かったらどうぞ、そうお伝え下さい。

闖入者 あのお、大丈夫でしょうか。

犬番 大丈夫といえますと。

闖入者 (声をひそめて) 信用していいのでしょうか。

犬番 賭けですよ。笛を忘れないように、いいですね、二度吹くそうですから、そういつてますよ。

闖入者 あのお、どんな音色でしょうか。

犬番 あなた、さつき潮の音とまちがわれましたね。ちょっとしたヒントですが。

闖入者 そうでした。しかし、一度聴いておきませんか……。

犬番 どうです。

車掌 笛をやたらに吹くことはできません。何が起るか分からないのです。

犬番 なるほど。やたらに吹くことは出来ないそうですよ。

闖入者 (車掌に近づく) あのお、他所に聞こえないようにならうでしょう。ほんの……たしかめておきたいのです……ほ

んの小さな音でいいんですが。-

車掌答えない。闖入者、一同に静かに見られている。

カバンから、ピストルを取り出す。

闖入者 ほんの、ちょっとでいい、やって下さい。……そうだ……（上衣を脱ぐ）この中なら、この中ならいい。（いきなり車掌の頭から上衣を被せ、自分も頭を入れる）……これならいい。聞こえる……ああ、これは確かに潮の音だ。潮騒っていうものです。

闖入者、バスの外に落ちている。

バスの乗客は、目を閉じている。

闖入者 わたしは、身の安全を守るためにやったのです。あの笛の音色を覚えておかないと帰ってこれませんからね。ちがいますか。……わたしは、このようなブジョクを受けたのははじめてです！

犬番が、黙ったまま、闖入者のカバンをバスの下へ落とす。

葬儀人と歌手がやってくる。

葬儀人 失礼します。バスに乗りますので。

闖入者 この社会では、人権が大切に扱われる必要があります！

歌手、カバンを差し出す。

闖入者、取る。

おばさんが、バスから首を出す。

闖入者 訴えますよ。

おばさん 役に立ちませんよ。武器は、昼間つくられるものだから、それは役に立ちませんよ。ここは夜ですからね

え。ためしてごらんなさい……（笑う）忠告だよ。

闖入者 でも、あなた方は、ほら動けないじゃありませんか。

おばさん 昼間はね。でもここは夜だよ……ためしにやっごらん。

闖入者、バスの進行方向へ歩き出す。

おばさん そちらは、行止まりです。

闖入者、なおも行こうとするが、行けない。引きかえして、去る。

歌手、バスの乗降段に腰をおろす。

車掌 あのお、乗り降りのおじやまになりますから……。

歌手 (ふり向かずに) ええ、ああ、人が来たらよけます。

車掌 そこに坐るのは禁止されているんです。

歌手 少しのあいだです。

車掌 でも……あなたがそのままにしていらっしゃるとわたし、困ります。

歌手 ……そうですか。(どく)

車掌 あの……ベンチがあります、ほら、あそこに。よろしかったらどうぞ。

ボートが見える

歌手、ボートにすわる。車掌がとなりへ。

第三の情景 —— ヘアダムとイヴの唄

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかける。

絵へ大きな幼獣

葬儀人、バスに乗る。

葬儀人 みなさん、こんばんは。いい晩ですね。少し風がぬるいかもかもしれませんが。まあ、我慢できます。

乗客たち、こんばんわの挨拶。

犬番は、鬱状態うつに入っている。

おばさん あんたは……。

葬儀人 ああ、おばさんですね。

おばさん まだ歩いてるんだねえ。

葬儀人 ええ、まだ歩いていますよ。

おばさん (みんなに) この方は、人を探しているんですよ。

男 (望遠鏡をのぞいたまま、ていねいに) 永いことですか。

葬儀人 ええ、永いことです。

先生 ……あの、私でもお役に立てますか。

葬儀人 それはもう……。

おばさん さ、ここへ、おすわりなさい。

みんな、又、目をつむる。

先生、上を見あげる。

先生 お話していいですか。

男 どうしてです。

先生 お話してもいいかと思って。

男 見えなくなってきたるんですよ。ああ……見えなくなって……沈んでいきやがる。

先生 夜が近いのですわ。……でも、おもしろいですね、煙突の倒れるのを見ようとするなんて。おもしろいですわ。

男 あれに興味をもってるなんて、仲間みたいな気がします……。大きな煙突の解体作業ですからね、今に燈りをつけますよ。残ってますか。

先生 ええ……（水筒から水を注ぎ、渡す）喉が渴くんですね。私も、とても渴くんです。ですから、少し残させてもらいましたよ。……あその煙突のあとには、白い工場が建つそうですね。庭には芝生や大きな円い噴水があって、テニスコートも計画されているとか。

男 （水を飲むと、はじめて望遠鏡から目をはずす）この胸の中の、この洞みたいな、暗いところに、おれのこの奥の中に、あの煙突が立ってるなんて、ね、あんたにはわからないでしょうね。

先生 ええ……私は今日子供を生むんです。

男 鍾乳洞の石のようなものかもしれない。一人の男が、十年、十五年と、ねえ、煙突の下で、煙突の下に通っているうちに、
(たかぶる) 知らないうちに、ここんところに、あの煙突が居すわっちまうんだ。胸の中に立つんですよ、煙突が。おかしなもんです。でも本当なんです。じわじわ、高く脹れて行くんです。気がつくともう、どかそうたったって動きやしません。でも、どかそうとするんですね。時々、どかそうとするんですよ。時々、ここで大っきな声をたててみるんですよ(掌をま
るめ、凍える手を暖めるようにして、その中へ小さく、遠く) おーい。……おーい。(おちつく) ……呼ぶんです。きこ
えましたか。

先生 いいえ。

男 あんたはいいひとだなあ。……やってみませんか。

先生 ……私ですか。

男 ええ、そうですよ。

先生 できますかしら、私に。

男 できますよ。やったことないんですか。

先生 できませんわ。恥かしいんです。

男 内気なんですなえ。恥かしいことなんかありません。たいていの人はやってるんですよ。黙っていますけど。

先生 でも、……(真剣に) 私の胸の中は、とても悪い意識おそいでいっぱいなんです。

男 ああ……でも、やってごらんなさい。最初は、勇気がいるといえはいるかもしれないが、知らないひとと初めて会うよう

なものですよ。

先生 私の胸の中はとても……本当に……いやな意識おもいでいっぱいなんです。生徒たちの顔がみられないんです。なにが出てくるか、わかりません。

間

先生 あなたにもきらわれます。

男 でも、先生しかし……。

先生 どうしたらいいんでしょう、私……。

男 わかりますよ。あんなことをいうと、あとが、とてもつらい。……何とか、こう、胸が張り裂けるようで。

先生 ええ。

男 でも、少しは、ほんのです、ほんの少しは……、愉快というのではない……そら、胸の中が晴れるような……自分の欠点をしゃべると……。

先生 思わずいつてしまったんです。……私、生徒たちによくいうんですよ。へ苦しみは人に伝えるものではありません。でも、それが快樂になったら、まあ、それもいいでしょうけど……。

男 おずかしいですねえ。(望遠鏡に戻る)

先生 生徒たちは、でも、何か感じるんです。これを話すと、いつもシーンとするんです。……でも、本当はわかっている

かどうか、小学生ですから。

男 ああ……見えなくなっていました。

先生 お月さま……どうしたんでしょう。

男 ええ、あとは月だけがたよりです。

先生 こんな暗い中で煙突を壊すなんて……。

男 ゆだんはできません。……あれは、人間の労力でやるのかどうか、実は疑問があるんです。あの煙突自身がやるんじゃないかって……蟬の脱皮のようにです。煙突なんてものは、はじめから脱け殻みたいなものですから、おかしいんですけどね、でも、たしかそんな気がするんですよ。こう、……脱け出すんじゃないかって、蟬の脱皮のように……。

先生 やってみますわ、あれ。

男 やりますか。

先生 ……おーい。……おーい。

男 ……いいでしょう？

先生 ええ、とても。(目を閉じる)

歌手と車掌

車掌 ねえ、あなたでしよう、こんばんわ……ね、あなたですわね。しばらくでした。唄でわかりましたわ。

歌手 ……。

車掌 あなたですよ。随分変ってしまわれましたね。

歌手 ぼくは……。

車掌 痩せるのは女の、娼婦の悩みなんですってよ。本当の悩みは、男の悩みは太るものなんだそうですわ。

歌手 ……さっき、ぼくは、少女の手に触ったんです。ぼくが一番怖ろしいもののひとつは少女です。男のせいかもしれませんが……ぼくは余程緊張していたんでしょうか、手がひどく冷たくなっていました。まるで、靴からしみてくる雨のようだったんですよ。だから少し匂ったのかもれない。手を触れたとたんに、その子は逃げていってしまいました。でも、あの子の匂いは、手に、まだ残っています。……子供は、ぼくから距離をとると、暗がりから見返すんです。いつも、きつとふり向くんです。

車掌 本当に……。

歌手 本当に？ さあ、でも、まだ少しは残ってると思いますよ、この匂いは。

車掌 ……雨。

歌手 あなたは、やったことありませんか。

車掌 いいえ。……そんなに緊張するものですか。

歌手 緊張します。鏡の中の自分に触れることだって仲々むずかしいんですけど、それは比較にならないほどですよ。とにかく、幼い子供なんですから、だって、そうでしょう。

車掌 あたしにはできませんわ。

歌手 女のひとにはむずかしいという人もあります。でも、勿論そんなことはありませんよ。……ほんの一瞬でしたけど、ぼくは、あの子に触れたんですよ。

車掌 ええ、信じてますわ。

歌手 勿論、一瞬でした。

車掌 ええ。

歌手 大切なのは、あとで、見返されるということです。

間

歌手 ぼくの話が若干乱れているからといって気を許すな！ ぼくの話は、たとえば、深い夜に走る貨物列車はついに汚辱とは結合しないと考えるとき、なによりもまずその貨物列車にあいそづかしをされたくないのだ。できれば彼自身に耳を傾けさせたいのだ！ 貨物列車は深い夜を走る。汚辱というのは、目の前の茶碗よりは手に入れにくいと考えがちなものだが、それは一メートル以上の身長をもった魚が、ぼくのイメージの中に〈魚〉として登場しないと考えるようなものだ。それは、ぼくが、魚を何か好ましいものと誤解しているからなのだろう。誤解というものはまるで……。

車掌 雨ですよ。

車掌、ネツカチーフを拡げる。その下に歌手を入れる。

車掌 あたしを、憶えてる。

歌手 雨、っていったとき、思い出したよ。ぼくの唄に拍手してくれたひとだろう。

車掌 ええ。

歌手 あの店は「ムーン・ライト」

車掌 ちがうわ。「サン・シャイン」よ、「ムーン・ライト」は橋の手前だわ。

歌手 だって、きみは、背が高くて、ばかに黄色い服を着ていたひとじゃないか。

車掌 あれは、ちがうわ。あれは、あの黄色い服のひとよ。あたしは、どちらかという背が低くみえるわ。あたしは、そのうしろにいたのよ。たしか、ほら、レースの飾りをつけて……。

歌手 きみがあのひと。だったら、へわたし、あの雑貨屋のことだったら、とてもよく知ってるわ。っていったひとなんだね。

車掌 ……やっぱり憶えていてはくれなかったんだわ。

歌手 ……じゃ、そうだ。へ他人のもってる包みの中って、どうして気になるの。って尋いたひとだ。

車掌 ……。

歌手 肩を離さないでくれよ。触れていた肩が離れるほどいやなことはないよ。ね、……肩が離れたんで、それで、混乱しちゃってるんだよ。

車掌 ……あなたがうたい終って拍手したのはあたし一人だったわ……。

問

車掌 二人は何年かぶり出会ったの。……いい、あたしはバスに乗っていたの、あなたはここを通りがかったわ。まえに、ほんのちょっとしか向い合ったことがないのに、それでも、お互いにハツと思いました。一瞬おやつと思うのよ。まさかって、戸惑うかもしれないわ。だって、何年ぶりかなのに、それも、ちよつとのあいだしか目を見合わすことのなかった二人なんですもの。でも、次の瞬間に二人は相手を思い出すわ。そして、男のひとが口を開くわ……。

歌手 ……あのときは、ありがとう……。

車掌 いいえ、あれ、本当にいい唄だったんですもの。

歌手 ……どちらかというとお客さんにうけない唄なんです。でも、ぼくはあれが好きだ。ぼくはうたいましたね……。

歌手 思い起せない。

車掌 あれ、いい唄でしたわ。

歌手 ……でも、あなたも変わられましたね。目が大きくなりはしませんか。

車掌 そうでしょうが、あのときのままですわ。

歌手 ……。

車掌、へ小さな虫のあと追ってへをハミングしはじめる。

歌手、小さく、車掌のハミングについてうたいはじめる。

また帰ってこれるのに

もうあんなに速くへ

いってしまった

いってしまった

右手に船

左手に海もって

小さな虫のあと追って……。

歌手、思い起せない。車掌、拍手。

長くつづく。

歌手、糸口を見出す。

歌手 あなたの拍手でした。あのおかげで、しばらくしてから、酔っぱらいが、三人、手を拍きました。あなたの拍手につられて。三人でした。ぼくは、あなたのところへ、まっすぐ歩いて行きました。すると、あなたはいったのです。……へ今、

何時かしら〜。

車掌 ええ。……今、何時かしら。

歌手 それから、へねえ、一日って、何て永いんでしょう〜。

車掌 ねえ、一日って、何て永いんでしょうね、あなたは、そう思いません。

車掌、歌手の頭を抱く。

間

二人、ネツカチーフを上げ、空を見る。

車掌 雨よ。……降ってるわ。ね、降ってるわ。

第四の情景——〈お月さま、もしお月さま〉

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかける。

絵〈貨物列車と月〉

男、望遠鏡でのぞいている。

男 最後のふんばりをやるんです。いいですか、煙突は、まず、あの西側の方から、ゆっくりと頬ほをいれて行きます。きっと、そうです。じっくりと見とどけますよ。頬をいれ、脹らまし、破り落して……そこから、そっと脱け出していくんですね、きっと。

先生 夢ですか。

男 いいえ。

先生 夢でしたら、お手伝いはできませんわ。

男 そっと脱け出して行くんだ……。

先生 私、おかしなところを歩いていましてね。夢で迷い子になってるんです。広いところなんで、砂漠かな、って思うんです。でも、私、砂漠を見たことはありませんからね。あそこは、砂漠じゃないはずですよ。でもそこで、迷い子になって、随分歩くんです。……それが、自分でつくった迷路なんですよ。でも、それがわかって、そこでは目がさめないんです。何もかもわかっているのに目がさめないんです。そのときは、とても心細いんです。だれか救いに来てくれるだろうか、って。男 いつ生れるんです。

先生 予定日は今日なんです。でも、お腹が少しも、ね、脹れてないもんですから、嘘だっていわれましてね。

男 そういえば少し小さいですね。

先生 大分小さいんです。

男 喉が渴くって、いってましたね。

先生 ええ、それはもう。ああ思い出していますわ。

男 大丈夫ですよ。生れる証拠です。

先生 ありがとうございます。

犬番 (突然) おれが、どれほどはなもちならんかは、きっとおれ自身予想もできないにちがない。それがわかるかね、タバコ屋で尋いたら、黙って一番やすいタバコをよこしやがった。それがどんな答えか、タバコ屋の婆さんが何を聞いたか？……一つだけわかっていることがある。それは、おれが牝から生れたからにちがないということだ。おれが生れるときはどうだったか、うっかり見落してしまっただが、あいつが、軍用犬が子供を生むのをとっくりと眺めたことがあるからわかったんだが、牝は、子供を羊膜という半透明の膜で包んでいる。育むというわけだ、その中で。分娩のあと、産み落したあとで、牝はそれを舐めとるんだ。あれを見たとき、おれもああやられたんだって思い出したような気がしたよ。あれじゃ当り前だ、そう思った。あのときから、はじまったんだ。つまり、最初っからというわけだ。

おばさん (うたう)

お月さま もしお月さま

大きなお餅を

下さいませ

そのかわりには、お月さま

貝をひろうて

あげましょう

大きなお餅を

お月さま もしお月さま

葬儀人、鈴をふる。

車掌 ねえ、お話ししましょうか。

歌手 してあげるよ。

車掌 ええ、うれしいわ。

歌手 期待にそえるかなあ。

車掌 大丈夫。……何のおハナシ。

歌手 題はないよ。本当のハナシだ。

車掌 本当のハナシ……。つまらないわ。

歌手 でも、少年が出てくるよ。

車掌 子供が好きなのね。

歌手 本当は、子供の信じるハナシが好きなのさ。……でも、そうはいかない。できないんだよ。だから、少年が出てくる。

車掌 その子は、どんな子。'

歌手 走ってるんだ。

車掌 それ、さっき、触った子なの。

歌手 いいや、男の子だよ。走ってる子には触らないよ。それに、一人じゃなかった。

車掌 友だちといたのね。

歌手 その子は青いセーター。その子の友だちは黄色。黄色いセーターは、長靴をはいてた。

車掌 女の子は。

歌手 出てこない。蛙が出てくるけど。

車掌 蛙が何か話すの。

歌手 蛙はしゃべりません。黙ったきりです。何かいってもいいのに、黙ったきりなのです。

車掌 こわいのね。

歌手 でも、オハナシさ。

車掌 でも、こわいのね。

歌手 時にすりへらされることなく浮びあがる瞬間、光景というものがある。この蛙の光景は、あとでどういった光景になるのだろう。そう悪意ある光景にはならないと思うが、それは何とも確言はできない。しかし、ともかく、あとになってきつとめぐり戻ってくる光景になるだろうという予感はあるに違いない。このように予感しておけば、そう、それがどのような

光景となって現れてきても、ふいを打たれずにすむのだ。あの光景は、なにげないものだが、何か、この予感是不吉なのだ。いいかい。……蛙が、プラタナスの枯葉が風に吹き動かされているときのように、ひきずられていました。後ろ向きにひきずられていました。

車掌 後ろ向きに。

歌手 二人の少年が、糸に一匹の蛙を後ろ向きに括って小さな空道を走っています。

車掌 青と黄色のセーターね？ 黄色は長靴……。

歌手 蛙は、その少年たちに後ろ向きにひきずられながら、なにか苦業に身を挺しているように、一心に太い頸を上げ、粘液を垂らして、それを耐えています。

車掌 いやでしょうね。

歌手 ところが蛙は、つぎの瞬間何にぶち当らなければならぬかをうかがっているような、しかも、それが期待と似てしまっている目つきをしているのです。それほど奥深い目つきをして。

車掌 ああ……後ろ向きにひきずられるのは、きつとひどく怖いことなのね。

歌手 首のながい、青いセーターの少年が、停りました。

車掌 ……どうしたの？

歌手 蛙の姿を笑うためにです。

車掌 ……ね、また、ひきずられるの。

歌手 さあ、わかりません。青いセーターに聞いてみなくては。

車掌 ずっとひきずってればいいのに。拷問だわ、停るなんて。どうせ又、ひきずられるんでしょう……又。……どんなカオしているの、蛙。

歌手 ほとんど……あいかかわらずです。

車掌 まっくらやみかしら。

歌手 夕暮れ。街の方から見たら、この空地のある高台全体は、夕陽を背景に、ひと思いにやればはいでしまえそうな紙細工にちがいません。……青いセーターはまた走り出した。

車掌 やっぱり……。黄色のセーターは。

歌手 青いセーターのあとを追っている、長靴はいて。

車掌 ゴツポ、ゴツポ、ゴツポ……。

歌手 もっと早い。

車掌 ゴツポ、ゴツポ、ゴツポゴツポ……。

歌手 もっと。

車掌 ゴツポゴツポゴツポゴツポ……。

歌手 青いセーターは停りました。

車掌 また。……どうしたの。

歌手 ヘツカレタ〜というふうに関を動かしています。長靴も、まねて、額のあたりをあわてて拭ってから手をだらりとして同意してみせています。青いセーターが身体をひねりました。

車掌 ……どうしたの。

歌手 ふりかえろうとしたのでしょうか。蛙が、その拍子に、ひっぱられました。少年の目の前で、蛙は、ありったけの力をふりしぼって重たそうに跳んだのです。後ろ向きに。

車掌 後ろ向きに跳んだの。

歌手 青いセーターは、そう思いました。〈奴が後ろ向きのまま近寄った〉思わず、少年は糸を落とし、その場で一度跳びあがりました。それはまるで何かの競技の予備運動のようにみえました。青いセーターは蛙の背から二、三步後しざりし、それから、突然走り出しました。

車掌 逃げたのね。

二人立ち上る。

歌手、車掌の方に歩みよる。

歌手 逃げました。逃げた。走った。だが、いくら逃げても、逃げきることはできなかったのです。あかくようにして走っています。でもだめでした。(車掌、後しざりはじめる)

しかし、身体が左へ左へと廻って行くのです。この壁のような円の力からぬけだせないともいうように蛙を中心に、左へ左へ廻って行きます。まるで、大きな円い、静かなドームの中の追いかけてこでした。自分の息が、ゴウゴウとその大きなドームの中で揺れました。

車掌、走り出す。歌手、追う。二人はバスの向う側へ。

第五の情景 —— へあの娘が丘からやって来た

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりが、かげる。

絵へ青の中に芽吹く赤い花

葬儀人 事の起りは何でしたか。

おばさん 一人の男がやって来た、これだよ。

葬儀人 その男が、門を通ろうとした、そうですね。

男 あれは、何だろう。

先生 何か見えますか。

葬儀人 ……わたしは、門というやつがきらいでね。あそこじゃ、何をされるかわかったものじゃない。ひどいことをします。

それに、窓口ってものも、ぞっとしますね。

男 あれは、何だろう。

おばさん わたしは、あのおばあさんを思い出すわ。門の前で、歯を噛み砕いてね。死んだんだよ。あの時は、みんな考えたよ。へわたしにも出来るかしら〜ってね。で、……みんな帰っていった。へ今は出来ない……今は出来ない、ってね。

葬儀人 そうですか……

先生 今はっていったんですね……。

男 そういったんですか……。

娘がひとり、バスに向ってやってくる。

おばさん、目聴く娘を見つける。みんなに報らせる。

みんな、集る。犬番は躁状態になる。

おばさん こんばんわ。

娘 こんばんわ。(一同に見られる) こんばんわ、みなさん。

一同 (それぞれ) こんばんわ。

犬番 どうしました。

娘 あたし、ずうっと待ってたんです。でも、あのひとは来ませんでした。

葬儀人 あのひとつ、そういわれましたね？

娘 ……ええ。あのひとつ。

葬儀人 ああ……そうですか。

犬番 そうですか。

娘 ええ、でも来ませんでしたわ。

一同、沈黙。

先生 ……ながいあいだ待たすなんて……。

男 どんなひとなんです。

娘 ……ええ。

先生 ながいあいだ待たすなんてひどいひとですわ。

おばさん 用が出来たんだよ。娘さん。

犬番 そうです、何か、用が出来たんですよ。

娘 ええ……。

おばさん 電話は、なかったのかい。

娘 あの丘の上で約束したんです。

犬番 じゃあ、きっとそうです。何か用が出来たんですよ。それが、とても重要なやつで、娘でも、必ず、何とかするんです、あのひと。どんなことがあっても……今までずっとそうでした。

間

犬番 病気ということだって。……ねえ、そうですよ、病気ということだって考えられます。急病で病院へかつぎ込まれたら、ね、そら、それつきりです。ちよつと連絡できないもんです。

娘 ええ、……みなさんありがとう。

おばさん それに、ああいう立派な建物の中では、余計なことは頼めやしないんだよ。余計なことをいうと、殴られるんだからねえ。ほんとだよ。蹴られた人もいたよ。その、あんたのそのひとは、勿論一刻も早くあんたに報せたいんだよ。

先生 可哀そうですわ。

男 我慢してるんですよ。殴られるのはいい気持のもんじゃないからねえ。

娘 ええ、考えましたわ。でも……。

犬番 いいや、無理ありません。お若いんだから。わたしたちだって、それが余計なことだと思ってるわけじゃありませんよ。

娘 考えてみましたわ。

おばさん 永く待ったんだからね。

間

娘 あたしは、雨の中で待っていたんです。あのひとは、ひとを待たしちやいけないうっていました。……それに、とても勇敢なひとですわ。

間

おばさん じゃあ、そのひとは死んだんだね。

娘 ええ……そう思うんです。あたしも。

先生 ああ……。

間

葬儀人 若かったんでしょね、そのひとは。

娘 ええ。

葬儀人 永いあいだでしたか、そのひとは。

娘 ええ。

犬番 わたしは、妻と婚礼の席で始めて会いましたがね、その日のうちに愛するようになりましたよ。

葬儀人 若いひとを亡くするのは、つらいことですねえ。

犬番 そうでしょうか。

先生 でも、年をとって亡くなる方は、人の心を洗ってくれます。その時は、人はとてもいい心になります。

犬番 どれだけ生きてても、大てい、だれでも何もせずに死ぬんですよ。ほとんど何ひとつしないうちに。これが曲者だ。せぬうちについてやつがね。わたしを、わたしを見てくださいよ。どうみたって、これから先、何か出来るように思えんでしょう。どうですか。(笑う)ところが、このわたしは、ねえ、何か出来ると思ってるんですよ。何か……そりゃ、無理、出来ないですよ。……しかし、何か出来るんじゃないかってね……思ってるんですよ。きっとそうです。……今は出来ないですよ。しかし……。

おばさん あんた、軍用犬の番人だろう。

犬番 アアー(長い耐えがたい叫び)……あんたはひどいひとだね! え、あんたは、ケモノだ!

葬儀人 鈴をゆっくりとふりはじめる。

おばさん 匂いがするよ。

犬番 (低く) ね、みなさん、今は出来ないって、いいましたね。ね、いったでしょう。いったはずだ。いいかね、あんた

の死ぬのを待ってやる！ あんたの死ぬのを待ってやる！（大きく） わたしは、軍用犬を伴って廻るのをやめるんですよ！ も少しすれば、やめられるんだ！ 決心したんだ。

おばさん ……いつからだったかね、そう決心したのは。えっ。 ……あんたを気狂いにしてやるよ。

おばさん、黒い袋から、白い、不定形な、のっぺりした塊をとり出す。

犬番の前に差し出す。

おばさん ほうら、昨日、この世のどこかで、母親が一人、犬に喰い殺された。犬は母親のお腹を喰いやぶったのさ。番人が喉しかけた。この子は、こんなになっちまって……。そのせいだよ。番人が喉しかけたんだよ。

おばさん、白い塊を手からこぼす。

塊は、べたんと落ちる。

先生、うずくまる。

犬番、しばらくそれを見ている。

おばさんの唄が、深いところから聞こえてくる。鈴の音。

あああ

何て いやな日なんだろう

雨が降るし

歯が痛む

死神じじいが歯を出すし

ぬるい東風やってきた

あああ

何て いやな日なんだろう

雨が降るし

胃が痛む

気狂い女が片目をつむり

ぬるい東風やってきた

おばさんの唄にひきずられるように、犬番、白い塊をそっと抱きとり、バスを降りると、バスの周囲を歩きはじめる。

娘 ……親切な方ですね。

葬儀人 ええ、とても親切なおばさんです。

先生 (男へ) 水を下さい……水です。

男 (望遠鏡から目をはなせない) ちょっと待って……ああ……

先生 おねがいです。水です。

男 がまんして下さい。もうちょっとです……。

おばさん どこにあるんだね。

先生 あのひとが知っています。

男 ああ……何かが動くようだ。

おばさん ねえ、お水……わかるかい。

男 えっ、ああ……あのひとは、水が欲しいんです。

先生 ……水です。

男 ありますよ。……何かが動いたようだった。

第六の情景——〈蛙は雨の中で叡智をもった〉

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかける。

絵〈青い花火〉

歌手と車掌、バスの向う側から現れる。

歌手、あいかわらず大きな荷物を背負っている。

葬儀人二人を見やっている。

車掌 随分走ったのね。

歌手 うしろの黄色のセーターは、青いセーターのようすを一瞬のうちに理解しようとした。そうだろう、だって、急に駆け出したんだからね。

車掌 どう思ったの。

歌手 へふざけて、ふざけてぼくから逃げようとしている。……ぼくだって捕りたいときによくやるんだ。そうだ、あいつはふざけて逃げてる〈

車掌 で、長ぐつさんは、あとを追ってあげたのね。

歌手 青いセーターが残していった、円るいあとを、出来るだけ忠実になぞって追った。

車掌 ゴツポ、ゴツポ、ゴツポ、ゴツポゴツポゴツポ……（突然気づく）蛙は、どこにいるの。

歌手 黄色いセーターが引っぱって行ったと思うかい。

車掌 ……ドームの真中にあるわ。

歌手 当たったよ。オオきな、静かなドームの真中に、前肢を伸ばしきってまだ、苦業を受ける姿勢をとっている。でも、荒い息と、長靴の音が油みたいに、ゴンゴンと揺れている空気の中で……ゆっくりと目をつむったんだ。

間

車掌 ……勇敢だったのね。

歌手 目をつむったんだ。……わかってくれたんだね。

二人 瞞め合う。。

歌手 できるんだろうか。

車掌 ええ……。

歌手 とても勇敢だったんだ。

車掌 ええ、とても勇敢だったわ。

間

車掌 ……子供たちは。

歌手 ……うん。青いセーターは長靴の音に気づくと、こう考えたんだ。へあいつは、そうだ、ぼくが、ふざけて、わざと逃げてると思ってるんだ。そうだ、そうすればいい。ぼくはなんてバカなんだろう。ぼくは、ふざけて逃げてたんだ。……それから、青いセーターは、少し追われて捕まった。息を大きくついてへ捕まった。と思うために笑おうとしていた。……ところが、そうはいかなかったんだ。音は、消えずに、脹らんでいた。闇のドームの中に湧き立っていた……。

車掌 蛙は目をつむったんですものね。勇敢だったわ。

歌手 蛙の姿はもう見えませんでした。

車掌 ええ……。

歌手 音があったんだ。音が……そこに。

車掌 ……音になってしまったのね。ああ……蛙は音になってしまったんだわ。

間

歌手 音になってしまったんだ。ああ……蛙は音になってしまったんだ。

車掌 あたしなら雨になるわ。……身体中のありったけを搾って、雨になるわ。雨になって……匂いでわかるのよ、この雨み
たいに。……だれかが降ったんだなあって。

犬番、塊をもって通る。

犬番　みるな。……（弱々しく）触らないでくれ……触らないで……ああ触らないでくれ。……（立ち停る）

先生　おねがいします、水を。

男　もう、ないですよ。

先生　渴くんです。……生れるんですわね。

男　ええ、まちがえありません。

先生　渴くんです。

男　いいことがあります。（器を出す）……雨が降っています。（空へかざす）

車掌　さようなら。

歌手　さようなら。

歌手、車掌に水筒を渡して、去る。

車掌、バスへ。疲れきっている。

葬儀人と車掌 (mf)

男と先生 (f)

おばさん (mf ↓ pp)

犬番 (ff と pp)

娘 (p)

(葬儀人、鈴を振る。)

先生 黒い子は生みたくな
ないんです。

男 ……黒んぼとねたん

ですか。 お月さま

先生 いいえ。でも、い

やなんです。 蠅みたい

に痩せて黒かったんで

す。

(車掌に近づく。)

下さいます

男 大丈夫ですよ。

そのかわりには

お月さま

葬儀人 どうしました。

……唄い手さんは。

貝をひろうて

ハッピー

(車掌、先生に水筒を。)

車掌 お水。

(鈴がつづく。)

男 ああ……たすかりま

した。

お月様

もしお月さま

ハッピー

あげましょう

触るな。

大きなお餅を

見るな。

車掌 できるだろうかと

言いながら去きました。

葬儀人 だいぶ永いこと

話をしていましたね。

車掌 ええ。

い。

いいか、

葬儀人 どんなふうにい

っていました。

触るな。

ハッピー

先生 (車掌に近づいて) あの娘さん。

触るな。

あなたも子供をお産み

になったんですね。

触らないでくれ。

車掌 (先生に) いいえ。

(葬儀人に) ……ぼく

の生涯の第一幕はお
（男、望遠鏡に戻る。）

わったとわっていま
した。

先生　そうですか。

車掌さん、あんた、きい
てごらん。

葬儀人　どんなふうにい

っていました。

触らないでくれ。

車掌　できるだろうかっ
て。

（葬儀人、鈴をはげしく

みんな、きいてやるんだ
見るな。

振りはじめる。）

（先生、おばさんの方に

よ。

（車掌、おばさんの方へ

近づく。）

きこえるだろう……。

歩みはじめる。娘をみつ

（車掌に見られる。）

める。）

葬儀人　慣れることはで

触らないで下さい。

きない。慣れることは

……こんばんは……。

できはしないのだ。だ

車掌　（娘に）こんばん

触らないで。

が静かに。わたしの わ。……あのひとで

心よ、静かに。 すからね。いいです

さわぐことはないの ね。

だ。静かに。

(鈴、ゆるやかになりは

じめる)

そう、そう、静かにだ。

(逃げるように去る。)

おばさん ほら、きこえるだろう……。

男 だれか来ますね。

おばさん あっちだよ。

男 あっちはゆき止りです。

先生 壁ですわ、おばさん。門ですよ。

おばさん でも、やってくるんだよ……。

男 ああ、来ました。すごい。

ハッピーと呼ばれる青年、飛び出してくる。

バタリと倒れる。ひどい血。

瀕死である。——沈黙。

おばさん ……みんな、どうしたんだい。この人が死にそうだというのに。

男 どうすればいいんだろう。

おばさん わからないのかい。みんなで、言葉をかけてやるんだよ。

先生 これは、あの、本当のことでしょうか。

おばさん 飛び出してきたよ。

先生 本当のことでしょうか。

男 あの壁から、えっ、つきぬけてきたんだよ。

車掌 できたんですわね。

葬儀人 ……やったんですね。

車掌 ええ……。でも、信じますか。

葬儀人 わたしは、いろんなひとにあってきましたよ。

娘 あのひとは、ハッピーって、みんなに呼ばれています。

車掌 ハッピーですわ。あのひとですよ。

おばさん 飛び出して来たね。

車掌 できたんですわね。

男 すごい……何ていったらいいんだろう、俺はこんない方しか出来ないんだろうか。

先生 本当のことでしょうか。

男 俺がもっと言葉をもっていたら、何をいいたさだろう。

葬儀人と、おばさん、娘に寄る。

葬儀人 あなたは愛していましたか。

娘 ええ。

おばさん じゃあ、あんたは身も心も、魂もなにもかも捧げたんだね。

娘 そうしようとはしました。でも、あたしは……あのひとは、へお前はねんねだ、子供だ〜っていったんです。

葬儀人 そうですか……。どうです、愛されていたと思いますか。

娘 ……へお前は、おれの愛を受け入れるんだ。ささげることはない、受け入れること〜そういいました。

おばさん そういったのかい。

娘 ええ。

おばさん 悲しかったろう。可哀そうだねえ。

娘 いいえ、仕方ないんです。……あのひと、魂もなにもかもくれるんです、今日。約束したんです。

おばさん あんたは、愛されているんだよ。

娘 ええ。

葬儀人 わたしたちは、立ちあえるんですねえ。娘さん、あなたのおかげで。

娘 ええ。

先生 だれにやられたんでしょう。

葬儀人 昼間の人たちにです。それはたしかなことです、三百年の経験で知っているんですから。

娘 ええ。

車掌、娘のそばに寄り、手をさし出す。娘、段を降りる。

第七の情景——へハッピーがやってきた

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかける。

絵へ赤い馬へ

娘、黙ってハッピーを見おろしている。ハッピー、やっと顔をあげる。

ハッピー やあ！

娘 ……。

ハッピー ここは、どこだい？

娘 あたし、待ったわ……。

ハッピー ……。

娘 ハッピー！ 死んだと思ったわ。

娘、着たものを裂いて、血をふく。

ハッピー おれが来て、うれしいかい。

娘 ……ええ。

ハッピー 待ったんだね。

娘 ……永く待つと、死んだと思うわ。だれでも。だれでもそう考えるわ。……あの人たちもそうだったわ。

ハッピーー ここには、ひとがいるのかい。

娘 ええ、こっちを見ててくれるのよ。

ハッピーー じゃあ、まだ丘についてないんだなあ。

娘 ここよ……丘よ。

ハッピーー あの丘で逢いびきするんだよ、君と。

娘 あの丘よ、ハッピーー。

ハッピーー 伴れてってくれよ。行きたいんだ。

娘 ……ええ、いいわ。

ハッピーー ぼくは、ぼくの愛は、お前の身体や、殊にお前の美しい髪をこの掌の中で粉碎しなければならぬ。

葬儀人と車掌、壁になる。

鉄条網のある壁になって、二人のうしろに立つ。

壁には次の看板が掛っている。

CAUTION
THIS AREA PATROLLED
BY SENTRY DOGS
注意
此の地域を軍用犬が警戒している

犬番、塊を抱いて、通りすぎる。何かいいそうにして、しかし黙って通りすぎる。
娘、ハッピーの身体を起し、ゆっくりと立たせにかかる。

壁の男 おれは、少しまいているんだ。

壁の女 ええ、でも、立たなきゃいけないわ。

壁の男 そつとしておいてくれないかなあ。……ほんのちよつとでいいから。ほんのちよつとさ。

壁の女 ええ、でも、立たなくちゃならないわ。

壁の男 まいってるんだ……。

壁の女 わかってるわ、ハッピー。

ハッピー おれの内臓に、永いこと住んでたみみずが、さつき、のこのこ出て来やがったんだ。わかるかい。おれはお目にか
かっちゃったのさ。そいつが仲間と話をしてるのを立ち聞きしちまったんだ……永いこと住まわせてやったんだから感謝の
話でもしてるのかと思ったのさ。ところが、おれのみみずは、仲間にくどくどこぼしやがった。……ああ、ここに、永いこ
と住まわせてやった、おれのみみずがさ。

壁の女 わかるわ……静かにするのよ。

娘、ハッピーを立たせると、彼の魂を鎮めるように、ゆっくりと愛撫する。

ハッピー おれは、耐られなかったよ。えっ、わかるかい、お前？ たまらなかった。それで……おれは、肉屋の店さきへ行
ったんだ。肉屋のおやじに頼んだんだ。へ何もかも、剥ぎとってくれ、このおれのなにもかもだ〜って。おれの臓物を全部
ひきずり出してくれてな。へ見こみがありそうでしたら、それをきれいに洗って下さい。〜……肉屋はおれの顔を見もし
ない。おれはつづけていったよ。へまず手はじめに、この顔の、この皮からやってもらいたいんだが〜それでも、おやじの
奴、一言も口をきいてくれなかった。おれの決心がどれほど深いものかを見ようともしないんだ。……おれは、あの肉屋の
おやじを信用してたんだ。それなのに……。

壁の女 でも、あなたは、ここへ来たのよ、この丘の上に。

ハッピー ああ、おれは来たさ。でも、おれは、おれの臓物をお前にやるわけにはいかなかったんだよ。こないだの約束さ、
魂もなにもかもやるっていったけど……。

壁の女 ええ、ゆるしてあげるわ。

壁の男 ゆるしてくれるんだねえ。肉屋のおやじのせいだぜ。あの子が顔をしかめるようなものはやりたくないって、おれは
いったんだ。

壁の女 ええ……。

ハッピーは、真直ぐに、立とうとしている。娘、それをたすける。

壁の女 ねえ、ハッピー、あたしたちお店に行くのよ。今日ヘバース・デイっていうお店に行くのよ。約束……。

壁の男 ヘバース・デイか。あれは、いい店だ。約束したね。そうだ、行くんだよ。忘れちゃいないよ。おれは、ふっと、

あつ、この匂いは？ っつときどき思いもかけない時に、……ねえ、思いもかけない時に、ふっと、何か匂ってくる
ことがあるらう？ それが、とてもいい匂いなんだ。へああ、とてもいい匂いだけど、これは何の匂いだったらう？……匂い
ってやつはなぞだからね、仲々思い出せやしない。でも、それが、やっとわかる。うれしいよ。やっとわかるんだから。そ
れが、どうも、あの店の匂いなんだ、終点が。へああ、《ヘバース・デイ》の匂いだった……これで、この小さな旅行はお
しまいだ。

娘、ハッピーを抱えて歩きはじめる。

葬儀人 どうも……うまくやれましたか。

車掌 おじさん、どうもありがとうございます。

葬儀人 それはよかった。

二人、微笑^{わら}いあう。

にぎやかな音楽がきこえてくる。

第八の情景 —— へ《バス・デイ》でのパーティン

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりが、かげる。

絵〈遠くに廻る回転木馬〉

音楽。

バスは、このくに特有の色彩で、はなやかに飾りつけられて《バス・デイ》の様子をつくっている。乗客たち、それぞれ楽器をもって一生懸命鳴らしている。

おばさん いらっしやい。いらっしやい、ハッピー。

先生 いらっしやい、ハッピー。

男 今日は、必ずみえるだろうっていつていたところですよ。

葬儀人 やあ、ハッピー、あの娘だね。

車掌 ……いらっしやい。

おばさん ああ、娘さん、あんたが、あの娘ですね。

娘 ええ、あたしですわ。

おばさん ねえ、みなさん、このひとがハッピーのあの娘だよ。

葬儀人 さあ、ここです。ここがあなた方の席です。

先生 さあ、あの娘さん……。

娘 あの……あたしは……。

車掌 いいんです。あなたの名前はここでは通用しませんよ。みなさんあなたをもう知っているんですからね。あの娘で通るんですよ。

娘 ありがとうございます、みなさん。

おばさん (ささやく)では、あんたは、ハッピーに魂もなにもかも、もらったんだね。

娘 いいえ、でも、ハッピーは努力したんです。肉屋さんのところまで行ってきたんですよ。

葬儀人 いいんですよ、努力したんです。

おばさん そのうち、そうだよ、この世の中にはそのうちってことがあるっていうよ。

先生 今日は、きっといいことがあるって、みんな話していたんですよ。

男 なにかあるんじゃないかって。

車掌 本当だったわ、ハッピー。あの娘こといっしょにこのお店に来てくれるなんて。

葬儀人 さあ、みなさん、ハッピーと、あの娘このために、乾杯をしましょう。

にぎやいだ空気。

乾杯。

しばらくつづく。

おばさん さあ、ハッピーと、あの娘このために唄をたのみますよ。

車掌が出る。拍手。

さきほどからきこえていた音楽低くなる。

さわやかな前奏。

小さな虫のあと追って

あのこは

だんだん いってしまふ

いちにち いちにち

いってしまふ

あれだけで

まだ帰ってこれるのに

もう あんなに遠くへ

いってしまった

いってしまった

右手に船

左手に海もって

小さな虫のあと追って

唄、リフレインされる。

ハッピーと娘、中央に出て踊る。

みんな、楽しげに見ている。

ハッピー おれのいうことをきいてくれるね。

娘 なあに、ハッピー。

ハッピー 聴こえるかい。聴こえるね。

娘 ええ。はっきり聴こえるわ。

ハッピー おれは、おれは怖いんだよ。ねえ、死ぬときには、何か、かならず呟くもんだってのは本当だろうか。信じるかい。
娘 ……。

ハッピー もし、本当だとしたら、そうだとしたら、それを聴かないようにしてほしいんだよ。努力はするけど……もしいつちまったらさ。えっ、いいかい。それから、……ねえ、死んでも、しばらくは、このまま、こうして、立たしておいてくれよ。……そうしたいんだよ。

娘 ……でも、疲れるわ……。疲れると何をしでかすかわからなくなるのよ。心が動かなくなるわ。……あなたは話してくれ
たわ、あの丘の上で。ね、虹が出た日よ。へああ、ニジは、虹っていう字とそっくりだ。っていったわ。あれをごろんなさい。ね、虫でしょう、虫の死骸よ、あれは。

ハッピー ……。

娘 ……ハッピー。へおれは疲れてしまっていたんだ。っていったわ。へ目の前でひとが死んでも、心の奴、ぴくりともしや

がらねえんだ〜って。へしかも、そいつは、きつとおれが殺したにちがないのに……疲れのせいよ。あたし、あなたの死ぬのを見たって、きつと心が動かないわ。疲れてしまったら、心が動かなくなるのよ。

ハッピー いいから、立たしておいてくれよ。しばらくだ、しばらく我慢したいんだよ！ いいかい……。

娘 わかってよ、そうするわ、ハッピー。

間

娘 それから、あたし、どうすればいいの。

ハッピー そのあとは、……やっぱり寝せてくれよ……ゆっくりとき。……そうして、考える。

乗客たち、空へ通ずる声で

車掌 雨になるのよ。

おばさん そう雨になるんだよ。もう少しがんばって、世の中をしとすと腐らすんだよ。

娘 ありがとう……でも、このひとは……。

おばさん できるよ。あの門をつきぬけてこられたひたもの。

娘 このひとは、想像もできませんわ、雨になるなんて。

車掌 できますよ。

娘 ええ、でも、ハッピーは、〈雨は、ドッと降るんだ〉といっていましたわ。……(きさやく)ハッピー。……(呼ぶ)ねえ、ハッピー。

男 今のうちに脱け出すんだ。今なら出来るよ。今のうちに脱け出して……。

先生 聞いて下さい。ね、今のうちですよ。

犬番、塊を抱いて、急ぎ足に通る。

犬番 触らないでくれ。触らないでくれ……きもちがわるい。触らないでくれ。……きもちがわるい……。

男 ひとふんばりだよ。もうひとふんばりで崩れる。

先生 ああ……ねえ……ハッピー。

車掌 雨になるのよ。

おばさん 雨になるんだよ。やるんだよ。しとしとと。

娘 (やさしく)ハッピー。

ハッピー ……おれのおやじは、ね、死ぬ三日前におれをよんだんだ。へなあ、お前、おれが死ぬときに、笑いそうな顔したら、ぶん殴ってもいいからやめさせてくれ。ずっと、笑いながら知らねえ土地をほつつくのはやりきれねえからなあ。……又、どんな奴に出くわすかしれねえのになあ。いざ死ぬって段になって笑っちゃったら、そのあとずっと止めるわけにいか

ねえ。それがな、どういうわけか、やっちまいそうな気がしてならねえんだ。……とても笑うなんて、そんな気にはなれねえのに、だって、又、他の奴らと顔をあわせなきゃならねえ、それなのにやっちまいそうなんだ。……そういつてたなあ……もう一回やってくれるかい……。立たしておいてくれよ。へバーズ・デイの乾杯だよ。……おれ、何かいいそうで……。やってくれるかい……。我慢したいんだよ……。

間

車掌 いらっしやい。

おばさん いらっしやい。

先生 いらっしやい、ハッピー。

男 今日は、必ずみえるだろうっていったところですよ。

葬儀人 やあ、ハッピー、あの娘だね。

車掌 ……いらっしやい。

おばさん ああ、娘さん、あんたが、あの娘ですね。

娘 ええ、あたしですわ。

おばさん ねえ、みなさん、このひとがハッピーのあの娘だよ！

葬儀人 さあ、ここです。ここがあなた方の席です。

先生 さあ、あの娘さん……。

娘 あの……あたしは……。

車掌 いいんです。あなたの名前はここでは通用しませんよ。みなさんあなたをもう知っているんですからね。あの娘で通るんですよ。

娘 ありがとうございます、みなさん。

おばさん (ささやく)では、あんたは、ハッピーに魂もなにもかも、もらったんだね。

娘 いいえ。でも、ハッピーは努力したんです。肉屋さんのところまで行ってきたんですよ。

重なつて、犬番。

今度は、塊をひきずってくる。

犬番 これをたよりに……おれは、やっていく……近よるな……近よらないでくれ……触らないで……くれ、……触らないで……おれは……これをたよりにやっていく……触るな……。

葬儀人 いいんですよ。努力したんです。

おばさん そのうち、そうだよ、この世の中にはそのうちってことがあるっていうよ。

先生 今日は、きっといいことがあるって、みんな話していたんですよ。

男 なにかあるんじゃないかって。

車掌 本当だったわ、ハッピー。あの娘むすめといっしょにこのお店に来てくれるなんて。葬儀人 さあ、みなさん、ハッピーとあの娘むすめのために、乾杯をしましょう。

おばさん、ハッピーに近寄る。

彼の目の前で、人差し指を立て、ゆっくりと左右に振る。

おばさん ハッピーは、死んだよ。

間

星が消えはじめる。

おばさん さあ、……みんな、ここへ集っておくれ。お葬式だよ。膝をついて祈っておやり。

みんな、おばさんに従う。

第九の情景 —— へ太陽がまだ碧いうちにへ

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかける。

絵へ青い馬へ

幾人か、楽器を静かに鳴らしている。

葬儀人 ハッピーよ、お前は死んだ。

ハッピーよ、事が了えたときには、風は向きを変えろという。風は向きを変える。だから、ハッピーよ、われわれも、それにならって行く先を変えねばならぬのだ。

闖入者がカバンをもってやって来ている。

闖入者 あのお……さきほどは、どうも……。

中を覗きつつバスをつたって、向う側へ。

葬儀人 今朝、お前のしらぬどこかの家で、へ今朝はちがった風の音がしてるわ」という声がささやかれることだろう。どこかの家でへ今朝はちがった風の音がしてるわ」という声がわずかにおののくのだ。

ハッピーよ、今朝は、とどかぬ声に耳を傾けよ。

ハッピーよ、この声はやがて……。

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかげ。

葬儀人、この音に対抗して声をあげる。

闖入者、出てくる。

闖入者 あのお……さきほどは、どうも……。

葬儀人 己れを支払って出会う瞬間よ、われわれはつきにお前と出会うとするには、われわれは何を支払えばいいのか。

闖入者 あのお……きこえましたよ……。

葬儀人 己れに支払いが出来ぬとすれば、

瞬間よ、

われわれは、お前には希望を支払おう。

闖入者 あのお……二度でしたよ。ヒューヒューって……。

葬儀人 だいぶ使い古された希望だが、

瞬間よ、

お前は、受けとれぬとはいえぬのだ。

われわれは、お前には、希望を支払おう。

闖入者 あのう、みなさん……。

葬儀人 ハッピーよ、お前は死んだ。

事が了えたときには、風は向きを変えろという。

だから、われわれも、それにならって行手を変えねばならぬのだ。

雀はまだ眠っている。

太陽はまだ碧い。

ハッピーよ、今のうちだ。

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかける。

ハッピー、次第に崩れる。

白布が被せられる。

運ばれて、ボートの中へ。

楽器が単調に鳴っている。

犬番、白い塊を抱いて、ゆっくりとやってくる。

闖入者、不思議そうに、これらの光景をうち眺めている。

一向、バスの上から、舟を見送るように。

大型ジェット機が低空を飛ぶ。

あたりがかげろ。

やがて、おばさんの唄。

空が白む。

お月さま もしお月さま

大きなお餅を

下さいませ

そのかわりには お月さま

貝をひろうて

あげましょう

大きなお餅を

お月さま もしお月さま

低く合唱しながら、朝をむかえる。

鈴の音。

合唱につれて、その奥から

絵へずんぐりした、きいろの魚

魚の声 よくあることですが、寂しい小屋の窓には灯りが一つ点っていました。

その小さな灯りはなによりもその周囲を包む闇のために必要なものでした。

闇の中で小さな灯りを点していたのは、一人の老人と一人の少女でした。

老人は、その灯りを自らの手元を照らすことよりは、闇のために点していたにちがいありません。それほど、闇と光と影は、二人を中にして交歓しあっていたのです。

私は、波に身を浮かせて眺めていました。

二人は身体の表を輝かせていました。

二人は黙ったままでした。

私は、私の波のあいまの呼吸までが二人の静けさを乱すような気配に息を殺しました。

老人は静かに仕事をつづけ、少女は老人の手元と顔とを交互に、ゆっくりとした周期で覗いています。

私も、波の音のあいまからもれてやってくる木槌の音や、木をけずるなめらかな音を聴きました。

これは一枚の絵でした。あるいは、それは何処からか遠い路程を経てそこへやって来た瞬間でした。

その光景の優しさは、人の何ものかを失った時の、そして、それによってはじめて手にすることの出来たあるものを示していました。私はよく思うのです。人にとって優しさとは、それ以外にとりようのない、彼らの最後の態度ではないかと。それは全く価値のないものです。そして、それ故にやっと思ひよって他によって犯されない、沈黙と通ずる最後の態度なのです。

老人は、仕事の手をふと止めると、深い目差して少女を覗きました。少女は覗き返しています。老人はやがて、何か一言口を動かしました。

少女の手がのびて、ラセン状の木屑をとりました。そして、ひとつ頷いてから、少女は天使のように微笑みました。老人は、又仕事に戻りました。

老人がその時何を口にしたのか、少女が何を頷いたのかは、聴きとることはできませんでした。

私は、その時、大波に流されたのでした。

(注) 「お月さま、もしお月さま……」は、伊波普猷著「琉球の神話」にある古謡の伊波訳よりの改作。

○はじめとおわりの、もう一つの方法

〈はじめ〉（鳥の声のあとに）

声（男の声）コチラワ、民政府デス。ソノはずワ、ドウイタシマシタカ。ソチラワ、立入禁止区域デス。ミナサンワ、スミヤカニ、はずヲ移動サセナサイ。……イツマデモソノヨウニシテイマスト、ソチラワ、ヒガイハミナサンノ予想ヲ越エルコトニナリマス。スミヤカニ、コノ区域カラ出ナサイ。コチラワ、民政府デス。

〈おわり〉（魚の声の前に）

声（女の声）こちらは、日本国政府にっぽんです。こちらは日本国政府です。あなた方は、本日から、正式に日本国民として登録されました。おめでとうございます。

考えてみますと、あなた方は、さまざまな労苦を味あわれ、目に涙することも、しばしばであったとお察しします。しかし、われらは行動致しました。努力致しました。本日から、われわれがあなた方の政府です。あなた方は、ご自分の政府をもたれたのです。あなた方と共にこの土地を勝ちとることができたので。

本日からわれわれがあなた方の政府です。

こちらは日本国政府です。こちらは日本国政府です。あなた方は、本日から正式に日本国民として登録されました。おめ

でとうございます。

(急に、男の声) おそれいります。そこに止っておられるバスは、移動して下さい。誠に申しわけありません。われわれは、出来るだけ多くの方々に、この喜びをお伝えしたいのです。三分のあいだお待ちします。

(再び女の声) こちらは、日本国政府です。(つづく)

底本

『太田省吾 劇テキスト集(全)』

二〇〇七年九月十四日 初版発行

早月堂書房

『太田省吾戯曲集 老花夜想』

一九七九年

三一書房